Ⅰ　研究の概要

１　研究主題

「子どもの願いを大切にした指導計画の作成と指導のあり方」

２　主題設定の理由

本校は、病弱教育を専門とする特別支援学校であり、全国でも数少ない小児期発症の神経筋疾患を専門とする八雲病院に併設されている。そのため、教職員は、神経筋疾患児の教育において、病気や障害に対する医療的な配慮を基にした質の高い教育の追求と、教育実践を集積、継承し、発信してゆく役割を担っている。また、八雲病院は重症心身障害児（者）の病棟も有しており、現在本校には重度重複障害児が神経筋疾患児とほぼ同数在籍している。したがって、多種多様な特性をもつ重度重複障害児に対する自立活動などの指導の充実、および肢体不自由教育の専門性の向上と集積していく役割も担っている。

昨年度の研究成果としては、グループを類型別で編成したことで、小・中・高の学部間交流ができ、児童生徒を時間軸で見る機会となったことや普段接することの少ない児童生徒について共通理解をはかることができた。また、複数の教員で児童生徒のアセスメントを行い、授業改善につなげることができたことがあげられる。

また、反省点としては、研究主題の「良さ」「主体的」という概念を具体化していくことの難しさにより、グループによってとらえ方の差異が大きく、研究のまとまりに欠けたことである。また、学校全体として研究についての素地が未熟であり、研究の方法について具体的に示唆してゆく必要がある。

これらの成果と反省点をふまえ、今年度の校内研究では、ＰＡＴＨの技法を用いて「子どもの願い」を整理、各授業で育てる力を具体化させた指導計画の作成と授業のあり方を考える。「子どもの願い」は、本人の価値観や自己決定、将来の展望が大きく関係しており、本人がその願いの実現に向けて経験を積み重ねていくことで、キャリア発達が助長されると考える。また、運用については、個別の指導計画の目標と並列してＰＡＴＨの手法により導き出された目標（ＰＡＴＨシート「近い未来」）を授業の計画に組み込んでいくことで、「子どもの願い」に基づいた授業が実践でき、より授業の「意味づけ」「価値付け」「方向付け」がなされやすいと考える。グループは学部ごとに編成し、研究の効率化と効果的な運用を図る。

また、夏季休業等でＰＡＴＨや各授業実践を校内外に公開することで、全校で在籍する児童生徒の共通理解を促し、また広く意見をいただく機会としたい。

学校の課題としての専門性向上については、職員の入れ替わりが激しい本校の特徴を加味して、今ある経験知識の維持共有と新たな専門性の集積のため、校内研修会を計画的に実施する。

３　研究の目的

（１）　PATH の手法を用いて整理した「幸せの一番星」を全教職員で共通理解のもと、各指導計画に落とし込み、複数の授業で取り組むことで効果的な指導を目指す。

（２）　研究協議を通じて、目標に迫る指導のあり方を工夫、改善する。

（３）　グループでの授業研究を通して、授業力の向上を目指す。

４　対象

在籍する児童生徒（各グループ２名抽出を基本とする。）

５　研究の期間

平成２５年４月から平成２６年３月までの１年間

６　グループ編成

小学部Ｃ類型	中学部Ａ類型	中学部Ｂ２・Ｃ類型
高等部Ａ類型	高等部Ｂ類型	高等部Ｃ類型

上記、計６グループ（６～７名程度）とする。

※　Ａ類型：普通学校に準じた学習内容を行う類型

Ｂ類型：下学年および知的代替の学習内容を行う類型

Ｃ類型：自立活動を中心とした学習内容を行う類型

７　研究の方法

（１）　研究の流れ

＜５月～７月　PATH シートの作成から指導内容の整理＞

①　各グループで PATH の手法を使って、対象児童生徒の「幸せの一番星」から、年度末まで（半年後）の目標を設定する。（PATH シート　資料１参照）

②　「幸せの一番星」から導いた目標を達成するために、各授業で取り組む内容を整理する。（指導計画シート　資料２参照）

③　「幸せの一番星」から導いた目標を、個別の指導計画、年間指導計画に反映させる。

＜８月～１２月　授業実践＞

④　「幸せの一番星」から導いた目標を取り入れた授業を全教職員が行う。
（授業評価改善シート　資料３・資料４参照）

⑤　グループによる研究協議を行い、授業改善を図る。

⑥　授業ごとに成果と課題を整理する。（指導評価シート　資料５・資料６参照）

＜１月～３月　研究のまとめ＞

⑦　対象児童生徒ごとに成果と課題を整理する。

８　校内研修会の実施

	日　程	内　容	講　師	
1	４月	病気理解	国立病院機構八雲病院医長	石川悠加氏
2	４月	ＰＡＴＨ作成	特別支援教育センター研究員	三浦貴徳氏
3	５月	合わせた指導	教育課程検討委員会	千田・菊地・小原
4	６月	ＡＴ・ＩＣＴ	本校総合支援部	愛澤・水谷み

５	８月	自立活動（からだ）	本校教頭　　原田
６	８月	キャリア教育	本校研究部　　吉田
７	１１月	キャリア教育	＜校内研究会　講演＞ 札幌稲穂高等支援学校長　　木村宣孝氏

９　推進日程

	日にち	項　目	内　　容
１	４月１６日（火）	校内研修会	ＰＡＴＨについて（特別支援教育センター）
２	４月２６日（金）	全校研①	研究主題の提示、研究方法の説明
３	５月　７日（火）	研究日	ＰＡＴＨシート作成
４	５月１４日（火）	研究日	ＰＡＴＨシート作成
５	５月３１日（金）	研究日	ＰＡＴＨ シートｓｔｅｐ４まで完成
６	６月１４日（金）	研究日	step５　必要な力のブレーンライティング
７	６月２１日（金）	研究日	ＰＡＴＨシート・指導計画シート①の作成
８	７月　５日（金）	研究日	ＰＡＴＨシート・指導計画シート①の完成
９	７月１２日（金）	全校研②	ＰＡＴＨシート・指導計画シート①の発表
夏休み期間中：ＰＡＴＨの公開・付せんによる意見聴取			
10	８月３０日（金）	研究日	研究授業・研究協議
11	９月１３日（金）	研究日	〃
12	１０月　１日（火）	研究日	〃
13	１０月１８日（金）	研究日	〃　　・公開授業の指導案検討
14	１１月　５日（火）～	公開授業週間 （２週間）	各グループ１本の研究授業の公開
15	１１月　８日（金）	研究日	研究授業・研究協議
16	１１月１５日（金）	研究日	研究授業・研究協議
17	１１月２２日（金）	校内研究会	２グループからの発表・外部講師による助言・講評 「キャリア発達を促す教育」についての講演
18	１２月１３日（金）	研究日	〃
19	１月１６日（木）	研究日	研究のまとめ
20	１月２８日（火）	研究日	研究のまとめ
21	２月　４日（火）	全校研発表会①	研究のまとめを発表
22	２月　７日（金）	全校研発表会②	研究のまとめを発表
23	２月１４日（金）	原稿〆切	研究グループ原稿提出
24	３月中旬	研究紀要完成（ＣＤ－ＲＯＭ）、配布	

Ⅱ　研究の実際

１　ＰＡＴＨシートの作成から指導内容の整理

（１）ＰＡＴＨについて

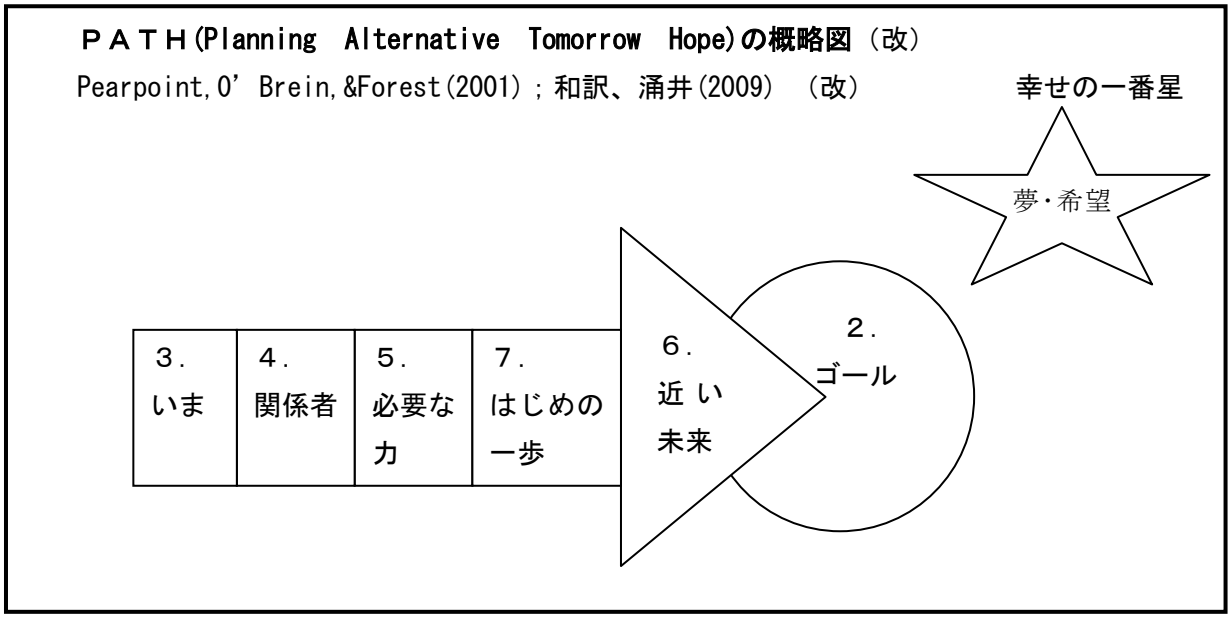
ＰＡＴＨ（Planning Alternative Tomorrows with Hope）は1991年　Forest氏（カナダ）等がインクルージョン教育を推進するための具体的な手立てとして開発したものである。日本では、「パートナーシップの原動力としての夢～カナダにおけるＭＡＰＳとＰＡＴＨの紹介～」として干川隆氏・肥後祥治氏により初めて紹介された。その後、国立特別支援教育総合研究所の教育相談年報や研究紀要の中での紹介や、北海道立特別支援教育センターの研修として扱われる等により広く知られ、各学校で用いられるようになった。

ＰＡＴＨは、障害者本人とそれにかかわる多くの人が一同に会してその人の夢や希望に基づきゴールを設定し、そのゴール達成のための作戦会議を行うツールである。

本校の研究では、PATHを教職員のみで行い、以下の視点で活用した。

① 教職員が、現実を中心に考える思考の壁をとりはらい、柔軟な発想を生み出すためのツールとして活用する。
② 参加した教職員が、それぞれの授業で何ができるかを具体化する指標とする 。
③ 目標に向かって、各授業で取り組むことの共有や一貫性をはかる場とする。

（２）本研究でのＰＡＴＨの活用



＜各グループで、ＰＡＴＨの手法を使って模造紙にまとめる＞

①　Step１　幸せの一番星(願い)を決める

・学校教育修了後の姿（２０歳程度）をイメージする。　※高３生は２５歳以上

・「本人の願い」が明確な場合はそれを書く。

・「本人の願い」が明確ではない場合、ブレーンライティングの手法を参考に、各自が付せんにそれぞれ対象児童生徒にとっての「幸せの一番星」を記入し、話し合って、集約し決定する。

・話し合いは、漠然とした言葉（例：お金持ちになる）について対象児童生徒にとって具体的な意味（例：ほしいものを買えるようになりたい）をグループ内で共有することを目的とする。

②　Step２　ゴールを設定する・感じる

・３年後の姿をイメージする。

・その思いや意味するところをグループ内で共有する。

・また１．の手法と同様にブレーンライティングまたは、ブレーンストーミングの手法を参考にグループ内で意見を出し合い、集約し決定する。

③　Step３　いまに根ざすこと

・現在の年月日を記入する。

・ゴールを目指すときに、現在の対象児童生徒がどのような様子や実態なのかを１．２．と同様の方法で記入する。

・「できる」ことに着目することが大切である。

④　Step４　夢をかなえるために誰を必要とするのか

・具体的な名前をあげる。

・名前が挙げられない場合、具体的な役職名・役割を記入する。

⑤　Step５　必要な力　　＜　全教職員によるブレーンライティング　＞

・ブレーンライティングの手法により必要な力を具体的にあげてもらう。
例えば、「コミュニケーション力」よりも、「相手の話を聞く力」等が望ましい。

・全教職員で出された「必要な力」を分類し各グループで整理する。

全教職員による PATH の共有と「Step５必要な力」ブレーンライティングの様子

⑥　Step６　近い未来の行動を図示する

・１年後の年月日を記入する。（年度末に設定）

・近い将来のあるべき姿をイメージし記入する。

⑦　Step７　夏休み明けからメンバー各々が授業で取り上げる内容を図示する

・Step６の目標を達成するために、各授業で取り組む内容を記入する。

・各授業でバランス良く「必要な力」を取り上げられるよう配慮する。

（３）指導計画シートの活用

ＰＡＴＨの「Step５　必要な力」「Step６　近い未来」から、各授業への取り組みを明記すシートをつくり、対象児童生徒ごとにまとめた。

（４）各種指導計画に反映

「個別の指導計画」「年間指導計画」および「指導略案」「指導案」に＜PATH により導かれた目標＞を１学期末に明記し、２学期の指導から取り入れた。

２　授業実践

（１）略案をもとにした研究授業と研究協議

全教職員による研究授業を行った。

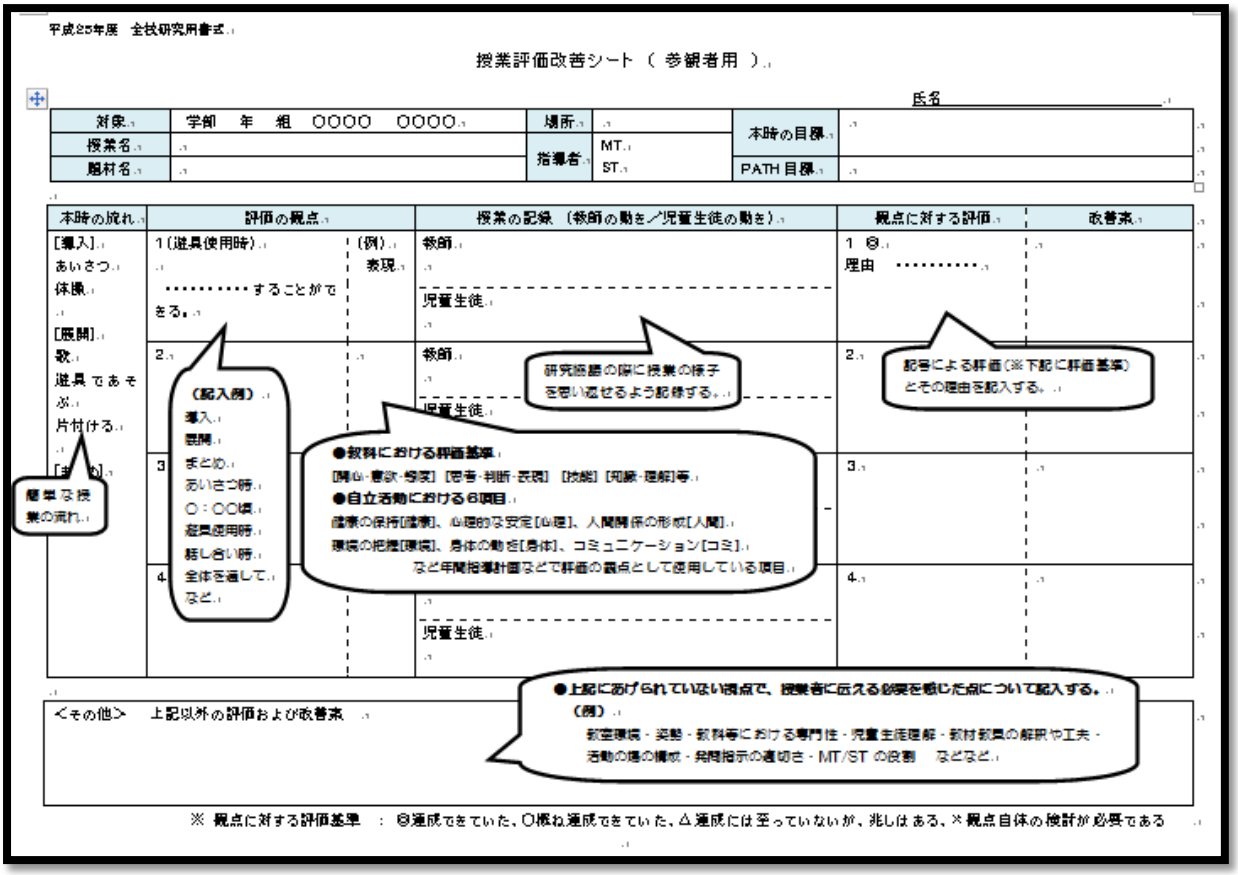
①　略案に「幸せの一番星」から導き出された目標を明記し、授業の中に盛り込む。

②　評価の観点の中に、「幸せの一番星」から導き出された目標を加味したものを含める。

③　「指導評価シート（授業者用）（参観者用）」を活用し、研究協議に活用する。

④　研究協議は、研究日にグループごとに行う。

○　資料３「　平成２５年度全校研究用書式　授業評価改善シート（参観者用）」



平成25年度　全校研究用書式

授業評価改善シート（ 参観者用 ）

氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

対象	学部　年　組　OOOO　OOOO	場所		本時の目標	
授業名		指導者	MT ST		
題材名				PATH 目標	

本時の流れ	評価の観点		授業の記録（教師の動き／児童生徒の動き）	観点に対する評価	改善案
[導入] あいさつ 体操 [展開] 歌 遊具であそぶ 片付ける [まとめ]	1（遊具使用時）	（例） 表現	教師 児童生徒	1 ◎ 理由 ……	
	2		教師 児童生徒	2	
	3			3	
	4		児童生徒	4	

簡単な授業の流れ

（記入例）
導入
展開
まとめ
あいさつ時
○：○○場
遊具使用時
話し合い時
全体を通して
など

研究協議の際に授業の様子を思い返せるよう記録する。

記号による評価（※下記に評価基準）とその理由を記入する。

●教科における評価基準
[関心・意欲・態度] [思考・判断・表現] [技能] [知識・理解]等
●自立活動における6項目
健康の保持[健康]、心理的な安定[心理]、人間関係の形成[人間]、
環境の把握[環境]、身体の動き[身体]、コミュニケーション[コミ]、
など年間指導計画などで評価の観点として使用している項目

●上記にあげられていない視点で、授業者に伝える必要を感じた点について記入する。
（例）
教室環境・姿勢・教科等における専門性・児童生徒理解・教材教具の解釈や工夫・活動の場の構成・発問指示の適切さ・MT/ST の役割　などなど

<その他>　上記以外の評価および改善案

※ 観点に対する評価基準　：　◎達成できていた、○概ね達成できていた、△達成には至っていないが、兆しはある、×観点自体の検討が必要である

・授業前に、略案と共に「評価の観点」（PATH の配慮点含む）を記入し、参観者に渡す。
・参観者は、このシートの授業の記録に書き込みながら参観し、観点に対する評価と理由、改善案を記入する。
・「評価の観点」以外の授業評価について「その他」の欄に記入する。
・参観者は、記入したシートを持って研究協議に参加する。
・研究協議に参加できない人は、記入したシートを研究協議の前に授業者に渡す。

○　資料４「　平成２５年度全校研究用書式　授業評価改善シート（授業者用）」

平成25年度　全校研究用書式

授業評価改善シート（ 授業者用 ）

対象	学部　年　組　OOOO　OOOO	場所		本時の目標	
授業名		指導者	MT		
題材名			ST	PATH 目標	

評価の観点	自己評価
1. ……することができる。	○ 改善点に気がついた。
2.	
3.	
4.	

研究協議をうけての自己評価を記入する。

授業の気づき（つながり）		
次時の授業改善への反映	教育課程（他の各教科等・領域）への反映	学校生活全般、病棟、家庭、地域生活への反映

●次時の授業改善　←　授業者が、研究協議で出された改善案からピックアップする。
●教育課程への反映　←　本時の内容とつながりがあると考えられる授業について、その取扱い方と適切な時期について記入する。
●他の生活場面への反映　←　例えば、コミュニケーションについての課題など、他の場面でも取り組んだ方がよいものについて記入する。

<その他>

上記にあげた評価の観点以外について、特記すべきことがあれば、ここに記入する。

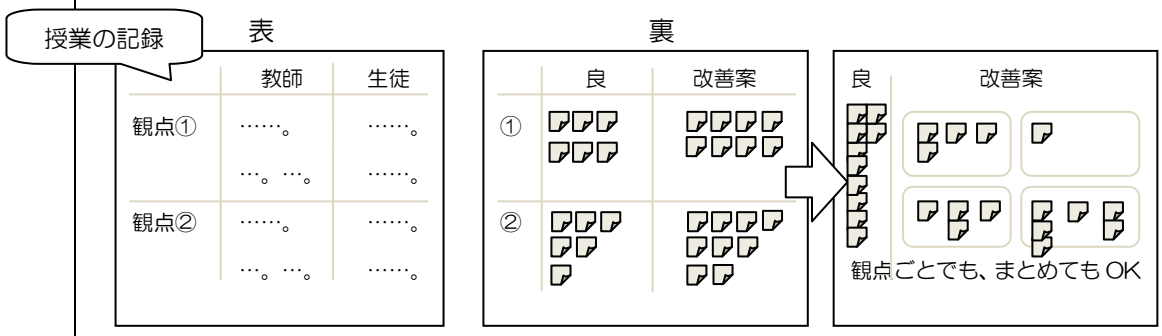
※ 観点に対する評価基準　：◎達成できていた、○概ね達成できていた、△達成には至っていないが、兆しはある、×観点自体の検討が必要である

・研究協議をうけて、評価の観点についての自己評価をつける
・研究協議をうけて、次時の授業に反映させる改善案を「次時の授業への反映」に記入する
・「教育課程への反映」「学校生活全般、病棟、家庭、地域生活への反映」があれば記入する。

（２）研究協議の方法のひな形提示（研究部より）

	授　業　者		グループメンバー
1　研究授業前	内　容	書　式	日程の決定や変更は、各自で書き込んでください。（３日前までにはお願いします）
	・実施日時記入 ・略案作成 ・略案保存 ・授業の評価の観点まで記入	研究授業調整表 H25 研究　略案 各グループ 授業評価改善シート （授業者・参観者）	**職員フォルダ → 16●校内研究** ・授業前までに**略案**と**授業評価改善シート**（**参観者用**）を受け取る ※　その他の参加者は、各自印刷。
	・各書式を印刷し、グループメンバーに渡す。 ・略案（指導案）を１部、職員室研究図書コーナーのファイルに綴る。		
2　研究授業	・当日、朝打ち合わせで時間場所を連絡 ＜　**授業実施**　＞ ※ビデオ撮影の有無は各グループにおまかせします。		・**授業評価改善シート(参観者用)**の「**授業の記録**」を各観点に合わせて記入 ・「**評価**」「**改善案**」を可能な限り記入 （研究授業の準備）
3　研究協議 （研究日） ※ ひな形を提示します。進める中で、これをベースに改善しても構いません。 改善した点があれば共有し、来年度以降、より汎用性が高い方法に改善していきたいと考えています。	司会進行はグループメンバーで行う。 （１回目は各グループ研究部員が行います） ＜　**授業の観点についての協議**　＞ **1**　観点についての説明。 **2**　観点ごとに「授業の記録」をグループ参加者で共有。 **3**　「良かった点」「改善案」を付せんに記入する。 **4**　１人ずつ良かった点と改善案を簡単に説明しながら貼る。 **5**　同様の内容があった場合、その場で伝え、その付せんのそばに自分の付せん貼っていく。 **6**　「改善案」について、周囲の意見を聞きながら、カテゴリー分けをする。（教材、授業展開、発問、姿勢等） **7**　授業者は次の授業に取り入れるものを１つの観点につき１つ（１つ以上でも可）選ぶ。		＜　**注意点**　＞ **1**　授業の説明ではない。観点についての補足等。 **3**　１付せんに１つ。簡潔に書く。モチベーションアップと分類を目的とする。 **4**　あらかじめシートに書いていないものでも可。 **7**　できる限りその場で選んでほしい（選ばれた人も嬉しい）

ホワイトボート等使用例



＜評価の観点以外の部分についての協議＞

・時間をとってもとらなくても可。シートに書いてあるので共有できる。
（授業者の希望、他の協議の時間、教員経験等加味して柔軟に設定してほしい）
・時間をとって行う場合、「改善案」のみ、上記と同様にまとめる。

4 研究協議後	**授 業 者**	**グループメンバー**
	・参観者から**授業評価改善シート**を受け取り、授業者用のシート項目に合わせて整理する。 ・すべてのシートを**綴る**。 ・綴ったシートを学部に**回覧**する。 ・回覧終わったら、授業者が**保管**。 研究授業および普段の授業で実践した後、各自、**指導評価シート**にまとめる。 （研究授業で取り扱った授業のみで可） **指導評価シート**は、１月１６日(木)研究日までに完成させる。	・記入した**授業評価改善シート**を授業者に渡す。 研究協議で使用した付せんを、Ａ４のプリントに張り直し、一緒に綴る。 教材教具 教室環境

＜グループ外の授業を参観したい場合＞

授業前　各フォルダから、略案・授業評価改善シートを各自印刷

授業中　授業評価改善シートに記入

授業後　記入した授業評価改善シートを、研究協議前に授業者に渡す。（ぜひ言葉をそえて…）

Ⅲ　研究のまとめ

１　研究の成果と課題

今年度は、研究主題を「子どもの願いを大切にした指導計画の作成と指導のありかた」とし、児童生徒の「幸せの一番星（PATH）」から導いた目標を各授業に落とし込み授業実践を行った。「子どもの願い」からスタートすることで、児童生徒の良さが引き出されるとともに、児童生徒が主体的に学習に取り組みやすくなり、成長が期待できるであろうというねらいがあった。また、複数の教職員で生徒の実態を共有する場を意図的に設け、研究授業・研究協議を通じて授業改善や他授業との連携を図ることもねらいとした。

共通の成果としては、対象とした児童生徒について１人につき平均7つの授業で取扱うことで、児童生徒の学習に効果的にはたらいたとほとんどのグループが評価している。その理由は授業を担当する複数の教職員で、研究授業と研究協議を行いながら授業改善をし、児童生徒の共通理解と手立ての共有ができたことが大きかった。

類型別の成果としては、A 類型（普通校に準ずる学習内容）・B 類型（下学年および知的代替の学習内容）のグループにおいて、「PATH」を児童生徒と共に作成し、夢を叶えるために必要な力を教師と共有することで、より効果的に運用できたところがあった。C 類型（自立活動を中心とした学習内容）においては、「幸せの一番星」という言葉で固定概念をはずし、新たな視点で肯定的に児童生徒をとらえ直すことができ、また長期的な展望を意識して取り組めたことが良かったと評価しているグループがあった。

研究の手法については、課題が残る。「PATH」は、実態把握から目標設定までの手順をわかりやすく話し合うツールとして活用できたことや、実態が大きく異なる児童生徒でも足並みを揃えて全校で取り組めた部分は良かった。しかし、「幸せの一番星」の設定が曖昧なこと等により、A、B類型では、「幸せの一番星」のしぼり込み方に差異がうまれた。それによって設定した目標が、各授業で設定しにくいものになることがあった。C類型では、言葉を発することができない児童生徒について「幸せの一番星」の設定のしづらさがあり、導き出された目標が個別の指導計画の目標と合致するグループが多く“研究”としての推進にはなりにくかった。

また、各種指導計画に「幸せの一番星」から導き出された目標を転記しながら盛り込んでいったが、半年後からの運用により、追表記しての運用が難しいところがあった。また自立活動の目標や教科の目標と並列して「幸せの一番星」から導き出された目標があったため、混乱があったこともある。

これらを総合的に判断すると、「幸せの一番星」が効果的に児童生徒の変容につながったところが一部あったものの、「幸せの一番星」に限らず、複数名で児童生徒の実態把握から目標設定に関わることや、授業の成果や課題、指導の手立てを共有しながら日々授業改善に取り組むことが、何より児童生徒の成長につながることを裏付けることができた。「子どもの願い」はキャリア発達を促す視点でも大切なものであり、「願い」は子どもの成長と共に変容する押さえのもと、実態把握の際にそのひとつの要素として取り入れることが望ましいと考える。本研究の流れは、個別の指導計画の目標をもとに授業実践に落とし込む一連の流れと一致している。今後、本研究を生かしていきたいと考える。

今年度、研究授業・研究協議に使った「授業評価改善シート」や「研究協議の方法」については、今回の反省をもとに使いやすいものに変更し、活用していきたいと考える。

２　次年度に向けて

研究の中で「PATH」の「Step５　必要な力」を洗い出す作業を、児童生徒毎に自由にあげてもらった。個別に整理することはもちろん大切であるが、児童生徒に身に付けてほしい力は、学校として整理した上で教育課程に反映されているはずである。本研究で、「Step５　必要な力」および「Step６　近い未来」を盛り込んで授業を行ったが、個別の指導計画と大きく変わらない目標でも、研究がからむと無理な展開となってしまう授業も見受けられたことから、学校として指導の方向性の共有と、教育課程の整理がまだ不十分であるととらえた。

来年度の研究は、「児童生徒一人一人の実態に即した教育課程の編成」に取り組みたいと考えている。理由としては、上記に加えて、教職員の入れ替わりが多く比較的特別支援学校や病弱教育の経験の浅い職員が多い本校には、本校の児童生徒の実態に即した指導内容の指針となるようなものが必要と考える。また、新学習指導要領全面実施を受けた教育課程の見直しが必要とも考えている。

類型別の課題とねらいは以下の通りである。

A 類型については、大学受験や一般的な就労が目指せる児童生徒と下学年の学習が必要な児童生徒が混在している状況がある。より児童生徒の実態にあった教育課程を編成したい。

B・C 類型については、指導内容は担任および教科等を担当する教職員個人の裁量にまかされている現状がある。学校として指導内容の指針となるような教育課程内容表の整備や、教科については１年間あるいは３年間を見通した指導内容の系統的な配列の整備が必要と考える。

以上の内容を、２年間かけて行い、平成２７年度の教育課程から順次反映していきたいと考える。